

## 同時代史としての近代以前の世界

鈴木 孝

本稿では今後の世界史教育の有効なあり方として、比較文明論的立場から世界史を再構成し、横につながる世界史像を認識していく上で、象徴的な時代として設定された「同時代史」を展開する。特に近代以前の世界史は、狭義の意味で「一体化」されないと言われてきたが、複数の異文明世界の多様な並存と、相互交流という視点から、近代とは異なる「一体化」された世界史像に迫ろうとするものである。

### A. 同時代的世界としての世界史の構成

#### 1. なぜ「同時代史」として世界史教育のあり方を再考するのか。

現代世界の複雑で多様な局面を同時代の情報として知りえる我々にとって、これらの問題をいかに客観的に認識していくかは、切実な問題となっている。ソ連の変化についてはまだ先がみえないこともあるが、20世紀の世界史が米ソを軸として展開してきたことは終ろうとしている。従来東ヨーロッパと呼ばれてきた地域において、社会主義が後退して（少なくともソ連の衛星圏ではなくなっている）しまった感はぬぐい去れない。加えてイラクによるクウェート併合以来の「湾岸危機」が、アラブ世界に関する我々の認識や歴史観を揺さぶっている。世界史教育において近現代史を重視する傾向は強くなっており、具体的方法論の域に問題が到達していることを認識しなければならない状況である。しかし、現実の世界史教育はこうした要請に十分応えていない。古代史から年代記のように展開する方法を踏襲する限り、近現代史の部分が薄くなってしまふことは、時間的制約もあって何ら変化しないのはあたり前で、今こそ近代以前の世界史を再構成することによって、この問題を解決すべきであろう。1989年3月告示の学習指導要領で示された〈世界史A〉は、文部省側の意図として明らかに近現代史重視の姿勢がみられる。近現代史のために近代以前を圧縮した構成になっている訳であるが、実に時間的制約を理由とした前近代史の圧縮方法で示された同時代史は、世界史教育の内容そのものをとらえ直し、従来のクロノロジカルな世界史をよりダイナミックに、魅力あるものに変えていく方法としてとらえることによって、新しい世界史教育の方法へつなげることが可能になってくる。

#### 2. 「同時代史」としての近代以前の世界への基本的視座

新しい学習指導要領の〈世界史A〉では、〈諸文明の接触と交流〉という観点で近代以前の世界史を構成している<sup>①</sup>。この観点そのものは特に新しいものではない。1960年代頃から、いわゆるヨーロッパ中心史観に対する批判として「比較文明論」が盛んに提唱されてきた。ヘーゲル、マルクス

からランケに至る「発展段階論」は、西ヨーロッパの社会の発展段階としての歴史構成であり、他の地域をこれに従属させてきたことへのアンチテーゼとして、シュペングラーやトインビー以来の「多文化圏論」を成立させ、複数の文明が並行的に発展してきたという認識で歴史を構成する方法が、世界史教育においても採用されてきたのである。<sup>②</sup>しかしながら、この「多文化圏論」には文化圏相互の作用を重視していないため横の脈絡性を欠くという批判が出され、基本文明と周辺文明の相互作用を「文明交流圏」の設定によってとらえ直すべきだとされた。<sup>③</sup>こうした「比較文明論」の観点は、成瀬治氏が石田英一郎氏や飯塚浩二氏の業績を受けて、世界史の血肉が横に並存する文化圏の形成と伝播、拡大、接触などの運動にあると、文化人類学の立場から総括したように、<sup>④</sup>その基本的あり方が示された。また、15・16世紀以降の諸地域の有機的連関においてグローバルな世界史が成立すると言われるが、こうした世界史の構造とは異質の、近代以前の世界史には明白な構造上の差異性が必要とされている。<sup>⑤</sup>この点で「比較文明論」は、異質の文明が同時に存在し、しかもそれぞれが不均等に発展するものであるという多様性を念頭にいた上で、相互の関係を探究する立場を明確にしているのである。<sup>⑥</sup>従って近代以前の世界史を「同時代史」として構成する場合には、それぞれの文明圏の発展にタイムラグを認めることを前提にしなければならない。ただし、このような「多文化圏論」を「比較文明論」の観点から継承してきた動向に対して“文化圏”とか“国家や地域”という枠組にとらわれずに、人や物の移動と交流によって横のつながりを見ようとする、「社会史」の主張があり、従来からの文明の交流視点を批判する動きもある。<sup>⑦</sup>

以上の視点をふまえると、〈2世紀の世界〉〈8世紀の世界〉〈13世紀の世界〉〈16世紀の世界〉〈17・18世紀の世界〉を高校世界史として扱っていく際には、同時代的世界内での文明の多様性に加えて、一つ一つの同時代史観の多様性を認識していくことが必要となってくる。この場合、〈～の世界〉とあるが、必ずしもその数字に表わされた世紀だけを扱うものではないことも考えなければならない。その前後の時代の内容まで拡大し、代表的な同時代的世界として構成したものである。また、諸文明・地域間の接触と交流についても、その同時代的世界特有の物的、人的、文化的交流が考えられ、併せて注目してみる必要もあろう。

## B. 同時代的世界としての世界史の展開

### 1. 2世紀の世界

#### (1) 基本的特色

古代の世界において、東西の文明が典型的に成立した時期として扱う〈2世紀の世界〉とはどういった世界だったのか。東の文明世界の焦点は漢帝国である。中国の伝統的体制イデオロギーとなる、基本的構造としての官僚制専制支配が儒教に基づいて形成されたところに着目する。この構造そのものは紀元前数世紀におけるペルシア帝国の構造も官僚制専制にあると考えられることから、東の文明世界としての普遍性を見出し、古代帝国の時代とすることができよう。また西の文明世界の焦点はローマ帝国である。ローマ帝国も東方世界との接触を通じて専制支配へ変容していく時代

も到来するが、地中海世界における古典期ギリシアの民主政とローマの共和政の伝統の継承者として位置づけることによって、東の世界との構造上の差異に着目する。更に古代世界特有の奴隷制度にも触れると、その社会構造への認識が深められるだろう。アリストテレスが奴隷を家畜と同一視し、自然の原理として自由人と奴隷が区別されて存在すると説いたことや、<sup>⑧</sup>ローマ時代の娯楽的見せ物としての剣闘士奴隷の実態<sup>⑨</sup>は興味を生徒に与える。また身分的差別の問題としてインド世界のカースト制もテーマ化することができよう。こうして東西基本文明の世界像を把握し、両文明世界間に介在する諸地域が相互交流の場となっていた実態をとらえたい。

## (2) 接触と交流

漢帝国の拡大によってオアシスの道が開かれていったことについては、前漢時代の張騫の事蹟や、後漢時代の西域都護班超及びその部下甘英による、西域経営と大秦国への派遣を欠落させることができない。中国側では当時ローマ帝国の存在を知っていた訳で、甘英が「条支国」（アンティオキアかスーサ？）まで到達したものの、大秦国（ローマ帝国）へは断念したという事実には、中国の拡大というより、オアシスの道を利用し東西間のキャラバン交易を中継していたパルチアの意図をむしろ積極的に評価すべきであろう。<sup>⑩</sup>西北インドにクシャーナ朝があり、ガンダーラ美術というヘレニズム的・インド的文化の融合がみられたことは、オアシスの道の途中からパルチアの搾取を嫌ってインド洋へ向かうルートが発展し、クシャーナ朝が物的に潤っていたことを基礎にしているはずである。

ローマ世界とインド世界は海の道によっても交流があった。1世紀の著作とされる『エリュトラ海案内記』は、ギリシア人のインド洋航路経験者の手によるものとされ、季節風（ヒッパロスの風）や具体的な物産の移動が明らかになっている。<sup>⑪</sup>インド洋は2世紀の世界にあって、その西半分がギリシア人、東半分がインド人による広域交易の基本舞台になっていたのである。かなり多量のローマ金貨や銀貨（アウレウス金貨、デナリウス銀貨）がインド全域から出土していることや、マウルヤ朝からクシャーナ朝に至るまで、西方文明の金銀貨幣をモデルにインド貨幣が造られていたことなどから、<sup>⑫</sup>ローマとインドの交流をみることができよう。

また、インド・東南アジアを中継地域として、中国世界とローマ世界が直接的に接触しようとした。2世紀後半に大秦王安敦（ローマ皇帝マルクス・アウレリウス・アントニヌス）の使者と名乗る者が、ヴェトナム南部を経て来航し、南海の産物を献上したことでローマ世界と通じたとある。<sup>⑬</sup>ヴェトナム南部にはインド文化の影響を受けた貿易立国扶南（ブノム）があり、1940年代にフランスの学術調査団の発掘によって、2枚のローマ金貨（アントニヌス・ピウス金貨、マルクス・アウレリウス・アントニヌス金貨）がオケオ遺跡から発見されたこと、同時に後漢時代の青銅鏡や、ヒンドゥー教神像、ガンダーラ式仏像も発見されたことによって、扶南国がインドから中国までの東の文明交流圏のターミナルであったとされている。<sup>⑭</sup>

漢とローマの関係をみると、ローマ世界側の方がより強烈に中国世界を意識していたようである。中国文明の粹を示す絹のことをセレスと呼び、セレス人の国として中国の存在を知っていた。とこ

ろが絹の正体についてはローマ人の無知と誤解があったようで、ヴェルギリウスはその詩の中で木の葉を梳いて採る毛と言ひ、プリニウスも『博物誌』の中で「森のウール」と言ったようである。東の文明が絹についての秘密を保持してその神秘性が増していったためか、やがてエーゲ海域からアッシリアにかけて「ボムビジン」と言われる絹の産することを知ったが、紫色（紫色の着用はステータス・シンボルで、ネロ帝は皇帝以外の者の着用・購入を大罪とした）に染色することを考えると、中国の絹の美しさと鮮かさが抜群だったためか、その珍重性は高められていった。<sup>15</sup>こうした絹と並んで、インド産の香辛料や宝石類が大量にローマ世界にもたらされ、ローマ人の市民生活を贅沢にしていた様子であり、セネカがストア派らしく戒めてもその浪費ぶりはエスカレートしていった。<sup>16</sup>そして、ローマ世界は東方世界へ不断に金銀貨幣を流出し、そのことによってローマ世界そのものが衰亡していったと考えられている。<sup>17</sup>2世紀の同時代的世界は、東西両極に突出して形成された文明世界（漢とローマ）が、中央アジアとインド洋という東西の中間世界において交流し、文明に成熟と衰亡を含む変容を与えた「同時代史」であった。4-5世紀におけるユーラシア大陸全般に及ぶ民族移動の潮流の中で、両文明世界は古代帝国を崩壊させたことも同時代的現象と言えるだろう。

## 2. 8世紀の世界

### (1) 基本的特色

ここでの同時代的世界の焦点はイスラム世界の勃興であろう。従って東アジア世界とヨーロッパ世界を並列させて三極構造としながらも、中央のイスラム世界が突出したものになる。また世界における宗教の分布から、この時代は宗教の地域的確定の時代でもあり、地域の世界が〈2世紀の世界〉と比較して文化的成熟をみせた時代とも言える。仏教世界としての東アジア世界（但し儒教や道教の発展もあってそれ自体多様であるが）、イスラム教の世界（地域的にはアフリカを含むので西アジア世界と呼ぶのは不適當）、キリスト教によるヨーロッパ世界（ビザンツ世界を含む）ができ上がり、異文化世界として並存し、従前より密接に関わり合いをもった複合性に同時代的世界を設定することができよう。しかしながら、異文化世界と関わりつつも自己世界が大きく変容していく時代ではなく、総じて各々の文明世界の独自性や発展の差異性が強かった時代でもあった。異文化世界への認識のあり方は、7世紀の中国が南越（ヴェトナム）を支配下に収めた際に示した、拒否的で無理解な態度にもあるように、<sup>18</sup>概して蔑視観をうかがわせ、周辺世界に対して唐時代の中国は「夷狄」視し、インドは「ムレッチャ」扱いをし、ビザンツやイスラム世界では相互に異教徒との戦いに神の「祝福」を感じ、外国使節へ自己の威儀を誇示する傾向があった。<sup>19</sup>

また、イスラム帝国と唐帝国の関係は両文明間の差異性に求められ、あえて近似性を挙げるとすれば、バグダッドと長安の様子（バグダッドの正式名称は“平安の都”で長安に似ている）とか、イラン人やトルコ人が共通してアッバース朝と唐に関わっていたことくらいであると言われる。<sup>20</sup>これに対してイスラム世界とヨーロッパ世界の間には密接な面が多い。有名な「マホメットなくし

でシャルルマーニュなし」と一般に言われるピレンヌ学説のもつ、ヨーロッパ世界の自律的社会形成観に批判を加え、「世界システム」概念によって、ヨーロッパ世界をイスラム世界システムを基本とした「亜周辺」=こぶと位置づける経済史からの提起があるように、<sup>21</sup> 両者を同一の構造としてとらえる傾向がある。更に封建社会の形成期としてこの時代を考えることも可能で、その場合ヨーロッパ世界の封建制度における「保護と代償」という契約的關係は、イスラム世界にも存在し、ジズヤは異教徒の安全と自由を保障するイスラム通念上の「ティンマ」(契約)であり、商行為における契約と同質であるというように、<sup>22</sup> 両世界の同質性の根拠ともなっている。

## (2) 接触と交流

唐帝国とアッバース朝の軍隊が、751年中央アジアのタラスにおいて戦ったことは、両文明の接触を象徴的に示している。この出会いは、西域経営を西方へ推進し、突厥帝国を支配下におくことによって中央アジアの交易ルートを確保しようとした唐帝国の拡大と、7世紀以来東西に拡大をめざすイスラム世界との必然的な接触と言える。タラスの戦いそのものは、東西を結ぶオアシスの道を中央アジアの政治情勢と絡めて概観したものや、<sup>23</sup> 中央アジアに覇権を構築した突厥帝国の分裂・抗争に乗じた唐側の計略という詳細な研究がある。<sup>24</sup> 8世紀半ばは唐帝国にかげりが見え始め、一方アッバース朝は成長途上であり、アッバース軍の勝利と唐のトランスオクシアナからの徹退という結果になった。しかし、捕虜としてサマルカンドへ行った中国人が、製紙技術を伝えたことは世界史上の画期的事件であった。

製紙法は1～2世紀に蔡倫という宦官によって確立されたもので、麻や樹皮の良質の植物繊維から組織的に紙を生産、これを普及させ、書写材料を竹簡・木牘から紙へと主張したことによる。<sup>25</sup> 古代世界ではこの類の紙は中国文明独特のもので、インドではパルミアヤシやコリハヤシなどのヤシ科の葉を、地中海世界ではパピルスや羊皮紙を使っていた。既に7世紀の半ばには中国の紙がイスラム世界に輸出されていたようだが、タラスの戦い後サマルカンドで製紙工場が設けられ、8世紀末のハルン・アッラシード時代のバグダットにも製紙工場が建てられ、10世紀までにイスラム世界では完全に中国製法の紙が支配的となった。<sup>26</sup> また、イスラム世界を経由してヨーロッパにも伝えられ、地域によって時間差があるものの、15世紀半ばにグーテンベルクが活字印刷を始める頃までには、羊皮紙(パーチメント)と子牛皮紙(ヴェラム)を市場から駆逐する技術だったのである。<sup>27</sup>

戦争による文明間の接触は、同時代的展開としてヨーロッパ世界とイスラム世界の間でも認められる。7世紀にはビザンツ世界がイスラム側の攻勢を懸命にくい止め、8世紀には地中海南半を制覇したイスラム軍がイベリア半島を占領し、フランク世界がこれをくい止めた。トゥール・ポアチエ間の戦いである。地中海の東西において衝撃的な接触をしたヨーロッパ世界は、変容をみせることになる。ビザンツ帝国ではテマ制の下に皇帝権力が強化され、一方フランクの台頭を利用したローマ教会が、ビザンツの支配から独立して独自のカトリック世界を形成しローマ教皇権を確立していった。しかし、カトリック世界=ラテン世界はイスラム世界に比べて「未開」「野蛮」な、「無知の時代」であり、13・14世紀に至るまで東方世界に対する不安をぬぐい去れなかった。<sup>28</sup>

イスラム世界の先進性は、8～9世紀においては異文化に対して柔軟で、イラン人やユダヤ人などの大物学者が多く輩出していることから、マホメット以来のアラブ人の進取性に由来すると言われる。<sup>29</sup>特に「バイト・アルヒクマ」（知恵の館）におけるギリシア学術の研究は注目すべきであり、テキストをビザンツ世界から大量に輸入し、ユダヤ教徒やネストリウス派キリスト教徒によって翻訳・研究させていったことは、イラン人の伝統としてササン朝時代に設けられた「ジュンティ・シャーポール学院」の業績を継承するものであった。<sup>30</sup>

さて、8世紀における同時代的世界の交流として、インド洋交易の空前の発展があげられよう。インド洋交易そのものは、ヘロドトスによって記された時代から15世紀の鄭和の航海時代に至るまで、多くの担い手によって連綿と営まれてきたのであるが、<sup>31</sup>8～9世紀にはイスラム世界を核とした交易システムが確立されていった。これはティナール金貨とティルハム銀貨とを融合したイスラムの貨幣システムが、ヌビアやスーダンの金を吸収し、ササン朝の銀を継承していくことによって形成され、周辺地域をくみ込んでいったことによるもので、西ヨーロッパでほとんど見られないイスラム金貨が北ヨーロッパで発見されていることから、ノルマン・スラブ世界（北東ヨーロッパ世界）ですら黒海からウクライナを通じてイスラム交易圏の周辺となっていたとされる。<sup>32</sup>更にイスラム商人は、インド洋の東半分から東南アジアを経て中国へも直接来航し、各地にコロニーをつくりあげ、<sup>33</sup>環インド洋交易圏のみならず、環南シナ海交易圏の主役になっていったのである。こうしてイスラム交易ネットワークが、バグダッドを中心に形成された訳だが、簡単に図表化すると以下のような物産がイスラム世界へ運ばれた。<sup>34</sup>

交易路の方向	交易の範囲	イスラム世界にもたらされた主な商品
東北ルート(イ)	中央アジア・ステップ ～シベリア	毛皮、奴隸、金属製品、フェルト
同 上 (ロ)	中央アジア～西域・中国	同上及び絹織物
同 上 (ハ)	中央アジア～北インド	カシミヤ織、じゃっこう
東南ルート(イ)	インド洋～アフリカ東岸	象牙、犀角、乳香、黒人奴隸
同 上 (ロ)	インド洋～東南アジア・ 中国	陶磁器、絹織物、香辛料、べっこう、 宝石
西南ルート(イ)	サハラ縦断	金
同 上 (ロ)	マグリブ～西アフリカ	金
東北ルート	地中海・黒海～ヨーロッパ	毛皮、白人奴隸、武器、貴金属

同時代的世界として8・9世紀にでき上がったイスラム世界を基本文明とする世界システムは、金銀貨幣のインド・中国への流出をもたらし、10世紀末の銀不足によって衰退していき、アッバース朝支配が弱まり地域的分散化が進行し、13世紀におけるマムルーク朝がイスラム世界の核として、カイロを中心とした交易システムを形成することによって継承されていくのである。<sup>35</sup>同時に10～13世紀まで宋朝による中国経済の繁栄がみられるのもこの狭間のことであった。<sup>36</sup>

### 3. 13世紀の世界

#### (1) 基本的特色

この時代は、モンゴル人によるユーラシア大陸全域に及ぶ征服活動によって展開された同時代的世界となる。中央アジアから北のステップ平原に展開した騎馬民族の世界は、紀元前数世紀のスキタイ民族以来常に周辺世界に脅威を与えていたが、13世紀のモンゴルによる大征服は未曾有の規模とスピードで各地域に展開され、政治的支配をもたらした。中国世界やイスラム世界も13世紀後半にはその勢力圏に入り、ヨーロッパ世界も特に東部においてパニック的状况となった。しかし、イスラム世界はその中心であったバグダッドを失ったことにより、カイロを中心にして新たな世界を再生させており、ヨーロッパ世界も、対イスラム世界への緊張に加え、対モンゴルへの緊張が生じる中でこれらを相殺させようとしたり、従来のイスラム世界の辺境でしかなかった状態から自立する動きが見られた<sup>37</sup>。モンゴル帝国による同時代的世界のあり方は、その初期の破壊と殺戮を前提にはいるが、やがて各地の先進文明を柔軟に受容し、融合させていくと同時に、各地域の文明を変容させていくことに特色があると思われる。14世紀になると“Pax Tatarica”（タタールの平和）と呼ばれる安定期が到来し、東西間の交流は活発に行なわれた。8世紀の世界ではインド洋交易の比重が相対的に高かったようだが、モンゴル帝国の時代は、こうした海上交易の活発な展開に加え、<sup>38</sup>ユーラシア大陸における統一的政治勢力の出現によって陸上交通路の安定という背景下に、オアシスの道、ステップの道の利用も目立つのである。

#### (2) 接触と交流

文明間の衝撃的な出会いは異文化に対する理解を変容させた。モンゴル人のことを13世紀ルイ9世時代のフランスにおいて「タルタル」と呼んだように、地獄の観念と結びつけ恐怖の対象としていた。（ラテン語では「タルタル」と言い、ギリシアやローマの神話において「地獄」の意味で使われていた。）しかし、モンゴルの地理的位置は西欧キリスト教世界にとって、よりイスラム世界が近いことを知り、歴史的な敵対者だったイスラム教徒にまずその矛先が向くという安堵感を得た。しかも、モンゴルとの接触によって、はるか東方に原始キリスト教徒（ネストリウス派）が多数存在することを知り、自己文明の外における自己文明の発見に自信と希望が得られたという指摘すらある<sup>39</sup>。モンゴルの征服活動初期に、ヨーロッパ世界は使節を派遣し、相手の習俗・世界観などを調査しており、<sup>40</sup>善悪両面にわたるモンゴル観が報告されている。

ネストリウス派キリスト教徒は7世紀以来中央アジアを拠点に活動し、アッバース朝期のバグダッドで活躍したことは前に触れた。11世紀にはモンゴルにも多くの信徒がおりカラコルムに教会もできた。アッバース朝を破滅させ、イル汗国を建てたフラグの妻ドクズ・ハトンや、シリア遠征軍の将キトブカ・ノヤンなどもネストリウス派とされ、13世紀には府主教区27、主教区230、信徒数100万を数えるほど隆盛をきわめた<sup>41</sup>。従って、ヨーロッパ世界が漠然と抱いていた“プレスター・ジョン伝説”にはこうした背景があったと思われる。モンゴル側から西欧世界に派遣されたパール・サウマは、このネストリウス派であった。パール・サウマはイル汗国のアルグン汗の使節として、

対マムルーク戦略という任務を帯び、13世紀末のヨーロッパ各地を訪れた。コンスタンティノーブルでビザンツ皇帝と会い、ローマでは教皇に会って枢機卿の前で説教してみせ、パリでフィリップ4世と会い、ボルドーにてイングランド王エドワード1世と会い、再度ローマで新教皇に会うというように、精力的に訪問外交を展開してどこでも歓迎を受けた<sup>42</sup>。結局、イル汗国と西欧諸国との対マムルーク朝挾撃作戦は実現をみなかった。それどころか、マムルーク側はこの外交攻勢に危機感を抱き、1289年にトリポリ、1291年にアッコンを陥落させ十字軍運動を完全に失敗に終らせた<sup>43</sup>。こうしてモンゴル帝国、マムルーク・イスラム世界、ヨーロッパ・キリスト教世界とが外交的接触を行ない、これにモンゴル帝国内の諸汗国の分裂・抗争という情勢が加わり、重層化された国際関係が同時代の世界としてでき上がったのである。

13世紀後半からのハイドゥの乱がおさまり、14世紀の「タタールの平和」においては、陸海双方の交易ルートが活発に利用された<sup>44</sup>。マルコ・ポーロの『世界の記述』（東方見聞録）や、イブン・バトゥータの『三大陸周遊記』にみる交易の発展はあまりにも有名だが、13世紀前半にあれほど破壊された中央アジアの隊商都市が14世紀には復興しており、イタリア人のペゴロッチィによる手引書（『商業実務書』あるいは『商業指南』）では、黒海から中央アジア経由でもモンゴルや中国に至る旅程、バザールでの取引方法、税や度量衡の換算など、交易の実態を詳細に伝えている<sup>45</sup>。こうした陸上交通路は交易とともに文化の伝播にも役立つし、14世紀特有の疫病であり17世紀までヨーロッパに死への絶えざる不安を与えた<sup>46</sup>、ペスト・ロードにもなったのである<sup>47</sup>。

13世紀のモンゴル帝国内では、トルコ系ウイグル商人の活動によって、中国から大量の銀が西に隣接するイスラム経済圏に搬出された<sup>48</sup>。同時に、13世紀後半に滅んだアッバース朝に代わってイスラム教世界の中心となるマムルーク朝が成立し、カイロを核にイスラム交易圏が再編成されていったのである。14世紀には地中海と紅海を結ぶ交易を独占し、空前の繁栄を示した<sup>49</sup>。マムルーク朝時代のインド洋交易の主役は香辛料であり、交易の舞台もペルシア湾から紅海へ移動し、スルタン政府は莫大な中間搾取が可能になった。ヨーロッパ側は直接紅海沿岸に行くことを願ったが、ナイル川を越えることは厳禁され、カイロにおいて商館や領事館すら設けられなかったことは<sup>50</sup>、マムルークによる交易システムの「聖域」として紅海が位置づけられていたことをものごとっている。この交易システムは、13世紀後半におけるジェノバ、ヴェネチア、フィレンツェなどのイタリア都市が打刻金貨を製造し、イスラム・ビザンツ金貨から始めて独立したことで<sup>51</sup>、マムルーク朝への金の流入の背景ができ、可能になったシステムであろう。ただし、ヨーロッパでの13世紀における経済圏の形成は、北ドイツのハンザ同盟やフランドルとの結びつきによる遠融地交易圏の成立を内包しており、8世紀の同時代的世界でのイスラム交易システムの周辺という位置づけにはなじまない状況になっていて、ヨーロッパ独自の交易システムに発展したものと言えるだろう。ジェノバ商人はマグリブ諸都市との交易で西スーダンの金を買ひ求め、香辛料買付けのためにつぎ込んだ<sup>52</sup>。西スーダンの金の豊かさについては、マリ王国のカンカン・ムーサ王のメッカ巡礼の際、カイロにもち込んだ金の多さのために為替相場が乱されたことに象徴的に示されている<sup>53</sup>。このようなマムルーク朝



の交易システムは、紅海をめぐるイエメンとの緊張関係をはらみつつ、<sup>54</sup> アフリカ東海岸独特の商業都市圏として、スワヒリ文明圏を発展させていった。イスラム化されたスワヒリ世界の南方のフロンティアだったキルワでは、中国製陶磁器・銅銭やインド産綿布なども見られ、イブン・バットゥータが「世界でいちばん美しい整然と建てられた町の一つで」、「町じゅうのつくりが上品である」と驚嘆しているほどである。<sup>55</sup>

海上交易ルートは宋元時代の中国の陶磁器を運ぶ道でもあった。10世紀後半から宋朝の交易は、陸路より海路の方に重きが置かれ、11世紀までに広州から杭州に至る海港都市に貿易市舶司を設けて国家が統制していた。<sup>56</sup> 中国のジャンク船はイスラム商人のダウ船に比べて大型で、インド洋の荒波を越えて速く東アフリカへ直接周航していた。特に13・14世紀の元朝時代の景德鎮窯の隆盛は、従来の青磁・青白磁・白磁に加えて染付や赤絵などの技法開発によってもたらされ、逸品として需要度が増し、西アジア地域へ運ばれたのである。<sup>57</sup> フビライ汗も南海貿易に着目し、1284年市舶都轉運司を杭州と泉州に設営し、積極的に交易を奨励してその利益の7割を国家がとるとしたほどである。<sup>58</sup> また泉州はこのような南海貿易の最大拠点として外国人にも知られており、マルコ・ポーロはもとより、例のイブン・バットゥータも「ザイトゥーンの港は世界最大のもの」で、大型ジャンクが数百隻ひしめいていたと報告し、<sup>59</sup> フランシスコ会のオドリコも泉州が「ボローニャ市の2倍ある」と驚嘆して、物は何でもそろっていると賞讃を惜しまなかった。<sup>60</sup> 羅針盤技術をイスラム世界に伝えたことと併せて、13世紀の同時代的世界での海上交流において中国世界のもつ意義はかなり大きいと言えよう。

また余談になるが、13世紀の同時代的世界での文化・学術交流について、従来イスラム科学や哲学の伝播及び翻訳はとり上げられてきたが、ヨーロッパ絵画に中国の技術が影響を与えたとする主張がなされている。特にジョットーのもつ色彩が、改良された中国の顔料に依存していることや、衣服の模様描写はパスパ文字を利用したものであること、更にシエナ派のアンブロージオ・ロレンツェッティの描写法が、「俯瞰法」という宋元時代の絵画技法に基づく東洋志向であることなど、<sup>61</sup> 興味深い観点が提起された。

#### 4. 16世紀の世界

##### (1) 基本的特色

この時代はユーラシア大陸の地域世界のもつ歴史的伝統の上に、近代以前の世界における最終的専制王朝が並立していた。すなわち明帝国、ムガル帝国、サファヴィー朝、オスマン帝国、ロシア帝国である。明朝では北方の遊牧民への対策に苦慮しながら、東方の朝鮮や南方の東南アジアに国威を誇示する伝統的な中華帝国としての成熟がみられ、産業の発達と内外の通商によって経済的に空前の繁栄に向かった。ムガル帝国下のインドにおいては、伝統的なヒンドゥー教社会にイスラム教が浸透し、双方が融合されて共存し、シーク教のように変容がみられたりしており、従来からの交易による富がその繁栄を支えていた。サファヴィー朝は、イスラム世界におけるイラン民族

の歴史的活躍という伝統の下に、シーア派世界として確立された。オスマン帝国はスンニー派イスラム世界の統合者としてマムルーク朝に代わって発展し、ヨーロッパ世界と隣接する東方世界の前衛であった。ロシア帝国は、ユーラシア大陸北部平原地域の統合者としての地位を、シベリア進出を通じて獲得しつつあった。ロシアはヨーロッパ世界とアジア世界に共通の脅威を与える地位をもつことになるのである。

また、この16世紀の同時代の世界の焦点は、依然としてイスラム世界に見出すことができよう。「トルコ人の世紀」と呼ぶにふさわしい状況が対ヨーロッパ関係において展開するのである。これはスレイマン1世時代のオスマン帝国が、ヨーロッパ世界におけるイタリア戦争や宗教改革時のドイツでの政治抗争などに重大な影響を与え、オスマン側でもイスラム世界での宗教対立として西アジアのヘゲモニー争いが緊迫の度を増して、ヨーロッパ世界との外交的関わりを求めるなど、相互依存的関係が形成されたことによる。

このようなユーラシア大陸全域にわたる諸文明の並存構造ができ上がった中で、ヨーロッパ世界は、従来地中海・黒海を通じて東方の異文化世界と関わってきた伝統的関係を超越し、直接アジアに登場したり、未知の世界に遭遇したのである。同時に従来の宗教的ドグマから自らを解放し、新しい近代システムを準備した訳である。15・16世紀は「大航海時代」と言われ（この語自体、ヨーロッパ中心的で、古代から「大航海」と言えるようなことは存在していた）、ヨーロッパ人によるアジア、新大陸進出のイメージが強く出されてきたが、ヨーロッパ世界の優位を示す近代世界商業システムは、17・18世紀にならないと確立されていかなないので、ここで扱う同時代の世界は、古代以来東方世界を軸にして展開されてきた世界史に、ヨーロッパがその一員として参入してくることによって、まったく新しい局面をもたらした時代と位置づけることができると思われる。

## (2) 接触と交流

喜望峰を回るインド洋への航路開拓によって、はたしてポルトガルは香辛料貿易を手中に収めたのだろうか。1498年にヴァスコ・ダ・ガマがカリカットに到達してから16世紀半ばにかけて、以後グジャラートに至るインド西北部の港をおさえ、更にこの間ホルムズやクウェートに進出してペルシア湾岸をおさえたとしても、ヨーロッパ経済の中心都市にリスボンがなれず、アントワープだったという指摘は注目すべきである。<sup>62</sup> ヴェネツィアでも16世紀初期に従来の4分の1に激減した香辛料輸入は、まもなく15世紀の水準に戻ったように、“ポルトガル・ショック”によって没落せずにもちこたえていたのである。<sup>63</sup> 16世紀のイタリア戦争でフランス王がイタリアに要求したものはヴェネツィアのドゥカート金貨であり、これは当時のヨーロッパ世界における国際通貨だった。<sup>64</sup> ヴェネツィアの回復は、当時の航海術と建船技術では紅海・地中海ルートの方がまったく合理的であったことを示しているだろう。<sup>65</sup>

この状況はオスマン帝国がマムルーク朝に代わっても続き、カイロ以外にもアレppo、ブルサ、イスタンブルなどへ、インド交易の地中海側ターミナルが分散したにすぎず、ヨーロッパ商人が依然として香辛料を求めてレヴァント地方に集まっていたことを伝えている。<sup>66</sup> 巨視的にみれば、ポル

トガルは、15世紀までのインド洋交易圏の成熟という既存の交易システムの一員になっただけと言える。「大航海」と呼ぶにふさわしい事実は15世紀前半にも既に存在した。明帝国初期の鄭和による「大遠征」がそれで、中華帝国としての朝貢貿易は、南シナ海域では実現したようだが、遠くアフリカのスワヒリ世界のモガディシオへも分遣隊が周航したように、インド洋東部地域へ到達したとあるのは、明側の朝貢勧誘という筋ではとらえられない。ティムール帝国がシャー・ルフ時代にオアシスの道を使って使節を明朝に派遣したことや、<sup>67</sup> マムルーク朝が紅海貿易の拠点として、メッカの外港ジッダをイエメンのラスール朝が支配するアデンに対抗させようとして、第7次鄭和の分遣隊を招致したとされることから、<sup>68</sup> 鄭和の航海そのものをインド洋をとりまく諸情勢とその交易システムの側から位置づける必要が生じている。宋代以降中国人がインド洋に進出した向きもあったが、15・16世紀には東部のアラビア海ではアラビア・イランの商人、西部のベンガル湾ではインド・イスラム商人がイニシアティブを握り活発な交易を支えていたのである。<sup>69</sup>

こうした伝統的で支配的なインド洋交易システムを前に、ポルトガルは香辛料貿易を独占できなかったようである。しかし、その途上アフリカ沿岸部において、後世のヨーロッパによる植民者の侵略を予感させるような行為を行なっていった。ヴァスコ・ダ・ガマがスワヒリ都市に来航した際、キルワ周辺では「あの連中は人柄が悪くうそつき」と言われ、マリンディでは「戦争と墮落の厄病神」と評価された。<sup>70</sup> このキルワにおいて、16世紀の初期にポルトガルは徹底的な破壊と掠奪を行っており、他のスワヒリ商業都市圏と同様自由で繁栄した時代が終ろうとしており、ヨーロッパ人による収奪の対象となったことが分かる。<sup>71</sup> キルワに関しては、かの見聞家のイブン・バトゥータの評価を前に紹介したが、ポルトガル人はこのような豊かで華麗な都市文明を前にして、大いにとまどい、十字軍的偏見、イスラム圏だから敵という感覚で接したようであり、人種の偏見に基づく破壊と掠奪でなかったのがせめてもの救いであるとデヴィットソンは述べている。<sup>72</sup>

同様の侵略は、スペインの手によってメヒコ・アンデス文明に対しても行なわれた。コルテスやピサロがいかにかステカ、インカ文明を滅亡に至らしめ、莫大な富を蓄積したかについては省略するが、カリブ海域の島々も同時代的にその荒廃は甚しいものがあつた。ドミニコ会に所属するラス・カサスがカルロス1世（カール5世）に対して、「インディアスから地獄のような光景が消えてなくなるように」と、スペイン人の行為に人道主義的憤りと宗教的恐れを感じて報告し「バハマ諸島の小さな島ですらセビリヤの国王果樹園よりすばらしい」場所でありながら、50万の人々が絶滅した悲惨さを克明に伝えている。<sup>73</sup> スペインは、15世紀においてインド原産の砂糖を西アフリカのカナリア諸島で生産し、16世紀にカリブ海域において砂糖キビ栽培と製糖工場の経営を始め、激減した原住民に代わって黒人奴隷を労働力として投入し始めるのである。<sup>74</sup> 16世紀のヨーロッパの著作者たちはコロンブスの業績のもつ歴史的価値をあまり評価しなかったようだ。同時代人としては新大陸に対する沈黙が多く、<sup>75</sup> トマス・モアなどは、アメリゴ・ヴェスプッチの3回目の航海の時に新世界に残留した人物を登場させて『ユートピア』を書いている訳であるが、<sup>76</sup> 現実の社会（ヘンリー8世時代のイギリスの教会制度や第1次エンクロージャーなど）の矛盾からの逃避としての「理想郷」

を新世界に投影させているのである。新世界を変容させつつあるヨーロッパ世界そのものが、いかに変容を受けようとしているか、という指摘があり、<sup>(77)</sup>ラス・カサスの価値は同時代人として稀少であったと言えよう。

1521年マゼランが、フィリピンのセブ島に隣接するマクタン島の王（土侯）ラブラプとの戦闘において落命した。その後部下たちの手で世界周航がなされたことよりも、重要な問題があるはずだ。ツヴァイクは、「自然界を意のままにし、あらゆる嵐に打ち勝ち、人間を征服した天才」とマゼランに敬意を払い、「虫けらのような」ラブラプの手で横死したと言ひ、この間のいきさつをマゼラン隊の一員の回想録を引いて詳細に再現している。<sup>(78)</sup>しかし、「虫けら」と言われたラブラプは、現フィリピン政府の建てた記念碑において、“Lapulapu became the First Filipino to have repelled European aggression”とされ、<sup>(79)</sup>民族的英雄なのである。セブ島に来航したマゼランは、教皇教書に基づいてスペイン国王の支配下にあるべき建て前に固執して、環南シナ海交易システムにおいて慣例・常識となっていた入港税の支払いを拒否していることからみて、「友好」が通じないとするマゼランの武力行使は「侵略」でしかなかったのである。16世紀後半には、レガスピによるルソン島攻略があり、ここをスペイン植民地とし、国王フェリペ2世にちなんで「フィリピン」としたのである。まもなく、ポルトガルを合併したスペインは、こうして世界商業を手中に収めたのである。

このように世界商業は、16世紀の同時代的世界においてグローバルなものになっていったのだが、アジアへの銀貨の流れをみると、東方世界の伝統的優位性は崩れていないようである。ペルーからスペインを経由したレアル銀貨の流れがあり、メキシコからフィリピンを経由したピアストル銀貨の流れがあり、<sup>(80)</sup>16～18世紀での中国世界でみられた明末清初における空前の銀経済の発展や、世界の金銀をのみ込む“ブラックホール”としてのインド世界でみられた、ムガル帝国全盛期におけるルピー銀貨の隆盛が、<sup>(81)</sup>このことを如実に示している。世界商業システムによるヨーロッパの優位性が確立されるのは、オランダやイギリスがスペインをおさえて前期資本主義を形成していく17・18世紀のことと言わねばなるまい。ただし、イギリスは、ポルトガルやスペインが海上航路を掌握していったことに早期から対抗しており、イワン4世時代のロシアとティムール帝国崩壊後のブハラに成立したシェイバニ朝を結ぶ商業ルートに着目し、エリザベス1世時代にロシアと16世紀後半には関係をもっていたことが指摘され、<sup>(82)</sup>大西洋航路においてスペイン船を私掠したこと<sup>(83)</sup>と併せて注目すべきであろう。

## 《おわりに》

〈17・18世紀の世界〉は、新学習指導要領において近代以前の同時代的世界として扱われるのだが、本稿では扱わなかった。科学思想のこともあり、内容的に多くなるので紙面の都合もあるが、近代世界が資本主義によって構造的に近代以前の世界を解体し、再編成するシステムをつくり上げていくことを考えると、〈19世紀の世界〉の導入としての扱いの方が適当であると判断したからである。本稿では近代以前の同時代的世界として16世紀までを展開したので、続稿において近現代世

界を展開したい。

(注)

- ① 文部省編『高等学校学習指導要領解説 地理・歴史編』 1990
- ② 同上『高等学校学習指導要領解説 社会編』 1972
- ③ 伊東俊太郎「比較文明の枠組」(比較文明学会編『比較文明』第1巻 刀水書房 1985)
- ④ 成瀬治『世界史の意識と理論』岩波書店 1977 29～38頁
- ⑤ 斉藤孝『歴史と歴史学』東京大学出版会 1975 120～122頁
- ⑥ 太田秀通「比較文明の方法とは」(比較文明学会編 前掲書 36～37頁)
- ⑦ 斯波義信「華僑」(『シリーズ世界史への問い3 移動と交流』岩波書店 1990 168～170頁)
- ⑧ アリストテレス『政治学』第1巻(村川堅太郎訳『西洋史料集成』所収 平凡社)
- ⑨ プルタルコス「クラッス伝」(プルターク『英雄伝』7 河野与一訳 岩波文庫 1978)  
土井正興『スパルタクスの蜂起』青木書店 1973
- ⑩ 『後漢書』巻47 班梁列伝 同左 巻88 西域伝 78 安息国
- ⑪ 邦訳は村川堅太郎訳 生活社 1946(『西洋史料集成』所収)
- ⑫ 湯浅赳男『文明の血液 — 貨幣から見た世界史 —』新評論 1988 91～93頁
- ⑬ 『後漢書』巻88 西域伝 78 大秦国
- ⑭ 中野美代子, 川本邦衛『NHK 海のシルクロード』第5巻 日本放送協会 58～65頁
- ⑮ リュセット・ブルノア著, 長澤和俊・伊藤健司訳『シルクロード— 絹文化の起源をさぐる —』  
河出書房新社 1980 45～52頁
- ⑯ 弓削達『素顔のローマ人』(堀米庸三・前嶋信次監修『生活の世界歴史』第3巻 河出書房新  
社 1975 pp. 117-120)
- ⑰ 湯浅 前掲書 93頁
- ⑱ J.H. エリオット著 越智武臣・川北稔訳『旧世界と新世界1492-1650』岩波書店 1975 25頁
- ⑲ 前嶋信次「唐文化とイスラム文化」(前嶋信次『東西文化交流の諸相』同刊行会 1971 73～  
74頁)
- ⑳ 同上 79～80頁
- ㉑ 湯浅 前掲書 208～209頁
- ㉒ 佐藤次高「保護と代償」(朝日百科『世界の歴史』32 朝日新聞社 1989 B-194頁)
- ㉓ 山田信夫編『東西文明の交流2 ベルシアと唐』平凡社 1971 196～215頁
- ㉔ 前嶋信次「タラス戦考」(前嶋 前掲書 129～200頁)
- ㉕ 小林嬌一『紙の今昔』新潮選書 1986 15～17頁 27～28頁
- ㉖ 伊瀬仙太郎『世界文化交流史』金星堂 1963 228～229頁
- ㉗ R.J. フォーブス著 田中実訳『技術の歴史』岩波書店 1977 132～133頁

- ⑳ R.W.サザーン著 鈴木利章訳『ヨーロッパとイスラム世界』岩波現代選書 1980 7～13頁
- ㉑ 前嶋信次「アラビア史と外来文化」(前嶋 前掲書 864頁)
- ㉒ 嶋田襄平編『東西文明の交流3 イスラム帝国の遺産』平凡社 1970 234～235頁
- ㉓ 三浦朱門, 増田四郎『NHK海のシルクロード』第4巻 日本放送協会 1988 242～277頁
- ㉔ 湯浅 前掲書 111～134頁 210～218頁
- ㉕ 前嶋信次「泉州の波斯人と蒲寿庚」(前嶋 前掲書 344～347頁)  
桑原隲蔵『蒲寿庚の事蹟』(『桑原隲蔵全集』第5巻) 岩波書店 1988 142～148頁
- ㉖ 湯浅 前掲書 140～141頁
- ㉗ 同上 146～152頁
- ㉘ 同上 166～171頁 240頁
- ㉙ 同上 258～259頁
- ㉚ 家島彦一「モンゴル帝国時代のインド洋貿易」(『東洋学報』57-3;4 1976)
- ㉛ R.W.サザーン 前掲書 58～62頁
- ㉜ カルピニ, ルブルク著 護雅夫訳『中央アジア・蒙古旅行記』1965 19～20頁
- ㉝ 森安達也『キリスト教史Ⅲ』世界宗教史叢書3 山川出版社 1978
- ㉞ 佐口透編『東西文明の交流4 モンゴル帝国と西洋』平凡社 1970 183～200頁  
ドーソン著 佐口透訳註『モンゴル帝国史』第5巻 平凡社東洋文庫 1976 247～249頁
- ㉟ アミン・マアルーフ著 牟田口義郎・新川雅子訳『アラブが見た十字軍』リポレポート 1986  
383～392頁
- ㊱ 佐口透「タタールの平和」(岩波講座『世界歴史』9 中世3 1970)
- ㊲ 田中英道『光は東方より』河出書房新社 1986
- ㊳ 木間瀬精三『死の舞踏』中公新書 1974 4～9頁 61～63頁 114～115頁
- ㊴ 立川昭二『病気の社会史』NHKブックス 1971 68～69頁
- ㊵ 湯浅 前掲者 178～179頁
- ㊶ 嶋田襄平編 前掲書 193～195頁
- ㊷ 同上 205～208頁
- ㊸ 湯浅 前掲書 229～231頁
- ㊹ 嶋田編 前掲書 205頁
- ㊺ B.デヴィッドソン著 貫名美隆訳『アフリカの過去 原典集 — 古代から現代まで』理論社  
1967 72～74頁
- ㊻ 家島彦一「東西交渉よりみた紅海とバーバルマンテブ」(『アラビア研究論叢』1976)
- ㊼ B.デヴィッドソン 前掲書 106～107頁  
尚, イブン・バトゥータの『三大陸周遊記』は前嶋信次の訳本(角川文庫 1961)があるが  
内容の省略が多く, この部分の引用文は載っていない。

- ⑤⑥ 『宋史』巻186 食貨志下8 互市舶
- ⑤⑦ 三上次男「中世の中東ならびに南アジアにおける中国陶磁」(三上『陶磁貿易史研究』中巻 中央公論美術出版 1988 29～32頁)
- ⑤⑧ 『元史』巻94 食貨志2 市舶
- ⑤⑨ イブン・バットゥータ 前嶋訳 前掲書 288頁
- ⑥⑩ オドリコ著 家入敏光訳『東洋旅行記 — カタイへの道 —』桃源社 1979 99頁
- ⑥⑪ 田中英道 前掲書
- ⑥⑫ 湯浅 前掲書 282頁
- ⑥⑬ W.H.マクニール 清水廣一郎訳『ヴェネツィア—東西ヨーロッパのかなめ 1081～1797—』岩波現代選書 1979 155頁 323頁
- ⑥⑭ 塩野七生『海の都の物語 ヴェネツィア共和国の二千年』精興社 1980 206～209頁
- ⑥⑮ 湯浅 前掲書 283頁
- ⑥⑯ 同上 332～333頁
- ⑥⑰ 佐口透編 前掲書 415～416頁
- ⑥⑱ 家島彦一「イスラーム史料中に見る鄭和遠征記事について」(『史学』38-4 1966)
- ⑥⑲ 榎一雄編『東西文明の交流5 西欧文明と東アジア』平凡社 1971 87～88頁
- ⑦⑰ B.デヴィッドソン 前掲書 108～109頁
- ⑦⑱ 同上 110～111頁 115～122頁
- ⑦⑲ 同上 98頁
- ⑦⑳ ラス・カサス著 染田秀藤訳『インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波文庫 1976 20頁 166～167頁
- ⑦㉑ 増田義郎『略奪の海カリブ』岩波新書 1989 24～29頁
- ⑦㉒ J.H.エリオット 前掲書 37～41頁
- ⑦㉓ トマス・モア著 平井正穂訳『ユートピア』岩波文庫 1957 11～16頁 61～67頁
- ⑦㉔ J.H.エリオット 前掲書 11頁
- ⑦㉕ シュテファン・ツヴァイク著 関楠生・河原忠彦訳『マゼラン、アメリゴ』(ツヴァイク全集 第16巻 みすず書房 1972) 220～235頁
- ⑦㉖ セブ島歴史資料館広場 1951建立
- ⑧⑰ 湯浅 前掲書 283頁
- ⑧⑱ 同上 335～337頁
- ⑧⑲ 佐口透『ロシアとアジア草原』ユーラシア文化史選書3 吉川弘文館 1966 22～29頁
- ⑧⑳ 増田義郎 前掲書 119～134頁